

## カナダ・トリケット島における 先史時代遺跡調査に伴う民族事例

長期変化班

真貝 理香 (総合地球環境学研究所)

### はじめに

総合地球環境学研究所では「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」(プロジェクト・リーダー:羽生淳子)が2014年度から2016年度までの3年間の予定で実施されている。そのプロジェクトの一環として、松井章先生(奈良文化財研究所)が、かねてより共同研究を行っていたDale Croes氏(Pacific Northwest Archaeological Services / Washington State University 客員研究員)と北米での遺跡調査への参加を企画し、2015年5月3日から17日にかけて、山本直人(名古屋大学)・菅野智則(東北大学)・真貝理香の3名が、カナダ・トリケット島(Triquet Island)における先史時代の遺跡(EkTb9)調査に参加した。

この調査は、Hakai Instituteの援助(註1)を受けたDuncan McLaren氏(University of Victoria)によるチームによるもので(McLaren, ed. 2013)、発掘調査の概要については別稿(菅野他2015)にて、投稿中である。この遺跡は約8000-5000Cal. BP.に比定される貝層や泥炭層を含む湿地遺跡であり、木製品、石器、大量の貝類・魚類、若干の海棲ほ乳類などが出土した。今回の調査において極めて興味深かったのは、現在は無人島となっているトリケット島が、自然環境が極めて良好な状態で保たれていたため、我々は森の中でテント生活をし、発掘調査のみならず、遺跡周辺で実験考古学さながらの体験ができたこと、また、調査には同島をテリトリーとするヘイルツク(Heiltsuk)族の若夫婦Joshua Vickers、Andrea Walkusさんが参加していたことで、彼らから伝統文化の一端を聞く事ができたことである。遺跡調査を目的としたフィールド・ワークではあったが、遺跡をとりまく自然環境や民族事例からも学ぶことが極めて多かったため、ここにそれらを記載して報告したい。なお、カナダでは先住民族はファースト・ネイションと呼ばれている。

### 1. 豊かな干潟がもたらすもの

北米北西海岸の先住民の生業を語る時、我々が一番に想起するのは、サケやニシンの季節的到来、そしてそれらを冬期食料とするための保存技術、この安定した豊かな食料が彼らの高い人口密度を支えたという

ストーリーである。このストーリーに異を唱えるつもりはないが、現地で、さらに我々が体感したのは、干潟～潮間帯をとりまく海洋資源の豊かさであった。

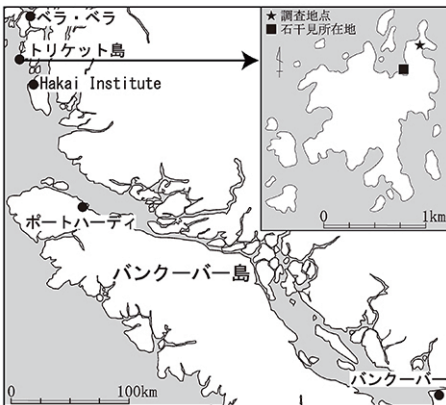
### (1) 貝類

トリケット島は東西-南北の各径が2キロにも満たない針葉樹におおわれた島で、島の外周は海岸が複雑に入り組んでいる(図1)。当地域の海岸域の特徴の一つは、潮位の差(干満差)が極めて大きいということで、最大時には5メートルにも及ぶ。このような大きな干満差は、日本では有明海等にしかみられない。我々は海岸で、海水をポンプでくみ上げ、発掘後の土を篩にかける水洗作業をしていたのだが、午前中はみるみるうちに潮が引くので作業場所を何度か沖に移動し、また夕方近くになると今度は潮が満ちてくるので、そのたびに篩とホースのついた木製三脚を移動させねばならなかった。

遺跡発掘区の貝層からは、Mussel(イガイ類)と、Butter Clam(二枚貝。バカガイに近い)、Barnacle(フジツボの一種)などが多く出土したが、この遺跡の北側には遠浅の干潟が広がり、そこから東側に数分ほど歩くと、一転、岩礁性の海岸となる。遺跡から砂泥性と岩礁性両方の貝類が出土するのも首肯できる。我々が引き潮時に潮干狩りを行なったところ、砂浜下には殻長6cm以上の大形のButter Clamが無尽蔵ともいえるほど生息しており、またLittle Neckと呼ばれるアサリに似た貝も含めて、あっという間にバケツ一杯の二枚貝を採集できた(図2)。また岩礁性海岸の岩肌には、イガイやフジツボ、カメノテ類が、あちこちびっしりと群生していた。我々は意気揚々と収穫を持ち帰ったのだが、Andreaさんは、「今の時期、Butter Clamは食べられるかなあ」と、首をかしげている。彼らの間では「ニシンの卵の時期が終わったら(春)、Butter Clamは食べない」と言われているのだそうだ。これは夏場の貝類には、貝毒が発生することがあるので(貝の餌となるプランクトンが、まれに毒性を持つ)、その目安の時期を示したものであろう。他のメンバーの「大丈夫だ」という意見に従い、我々は、Butter Clam、Mussel、Chiton(ヒザラガイ)も茹でておいしく食べ、

お腹をこわすこともなかったのだが、それにしてもこれだけ身の大きな貝となると、数個食べるだけで意外にお腹が張るものである。我々日本人は Mussel を食べながら、「日本でこれだけのムール貝を食べたらどれだけ値段が高いか」とついつい考えながら手を伸ばしてしまっただが、現地の調査メンバーは、貝など、もううんざりと言わんばかりに、1～2個食べると見向きもしない。

干満の差が大きく干潟が広いということは、すなわち貝類の採集域が広いということでもあり、潮が引いた時には、岩礁の海岸側にも歩いて行きやすい。同島ではすでに複数の地点でボーリング調査が行なわれ、McLaren 氏は「この島全部が貝塚」と笑うが、この地域では周辺の島々にも多くの貝塚が存在している。永きに渡って大量の貝類を供給してきた環境、こうした貝類の存在もまた、当時の人々の安定した海産資源の一助となっていたことを伺い知る経験となった。



【図1：トリケット島地図】



【図2：潮干狩り】

## 2) 石垣状漁労トラップ (石干見)

広範な干潟域は、貝類採集の容易さだけをもたらしているのではない。干潟は極めてアクセスしやすい魚の「漁場」でもあるのだ。トリケット島の北部干潟には、かつてファースト・ネイションの人々によって作られた潮汐の干満差を利用した石積みの漁労ワナ (stone wall trap/stone trap) が、まだ残っていた (図1)。本

島の例は、アルファベットのVの字を2つ放射状に並べた形に、こぶし大～30cmほどの石を積み上げたもので、満潮時にトラップ内に侵入した魚が、引き潮時に石垣に遮られて取り残されたところを捕獲するものである (図3.4.)。もはや現在では使われておらず、ヘイルツク族の2人に尋ねても、いつごろ遺棄されたものか、はっきりしない。遺跡形成当時の人々が、果たしてこのようなトラップを利用していたかどうか、安易な類推は慎まねばならないが、我々が見学に行った際には、ちょうど perch (小型のスズキの一種) が死んでいた。遺跡からも perch の骨は出土しており興味深い。

現代の日本でも、こうした石積みのワナは、「石干見 (いしひみ・いしひび)」等と呼ばれて、九州や沖縄を中心に見られ、韓国・台湾・東南アジア・南太平洋諸島の各地沿岸でも、多数、類例が存在することが、田和など (田和2007) によってまとめられている。

ヘイルツク族の石垣状トラップを研究し、使用法の口承伝承の調査も行なっている White (2006,2011) によると、捕獲ターゲットとされるのは、まずサケ、そしてニシン、タラ、スズキ類と続く。アシカ・アザラシ類、ラッコ、ネズミイルカといった海棲ほ乳類を捕ることもあったようだ。また White は、石垣状トラップが作られる場所も干潟や河口、さらには地理的条件や捕獲の対象に応じて、石積みの形状にも円弧状や直線状など様々なタイプがあることを詳しく調査している。

現在ではもはや、石垣状トラップによる漁労は盛んではないものの、この地域では多数の石積みはまだ残っており、特に Bella Bella 地域の生業を研究した Pomeroy (1980) は、140のトラップを記録し、最大級のものは約243mにおよぶと報告している。

縄文時代の定置式漁労施設と考えられる例としては、後晩期の岩手県萩内遺跡の「エリ」状遺構の杭列など、複数例があるが、日本の先史時代の漁労活動においても、干満差の大きな干潟を持つ沿岸部遺跡においては (有明海沿岸など)、こうした石干見の存在も想定してよいのかもしれない。

また川を遡上するサケの捕獲に関しては、石干見だけでなく木製のトラップが使われ、同じくヘイルツク族のテリトリーであるバンクーバー島西岸の Koye River では、100年以上前に製作伝統がすたれてしまったサケ用の木製ヤナ (梁: wooden weir = 川を横断する大形の木製柵によるワナ) の製作を復元し、サケ漁を復活させるプロジェクトも進行中である。



【図3：トリケット島の石積みトラップ】  
(John Reynolds 撮影)

## 2. カズノコの伝統漁法

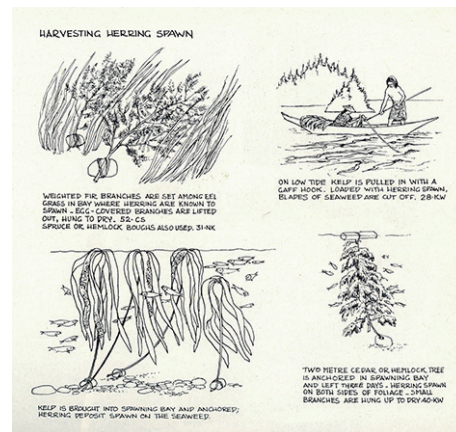
同島は無人島であるゆえ、調査期間中の食料はすべてボート、途中からカヌーに移し替えての搬入となった。その中で興味深かったのは、Joshua が持ち込んだ塩漬けニシンの卵（カズノコ）である。通常我々日本人が食べるカズノコは、産卵前の雌ニシンの体内から直接取り出されるために塊の形状を保っており、昆布に産卵した後のカズノコは「子持ち昆布」として食される。ところが、彼が持ってきた産卵後のカズノコについていたのは昆布ではなく、緑色の葉が残ったままの木の小枝なのである。聞いてみると、これはヘムロック (Hemlock: ベイツガ) の枝であり、これこそが Hilary Stewart (1977, 邦訳 1987) などが報告している、ファースト・ネイションによる伝統的なカズノコの採集法なのであった (図4, 註)。ニシンはサケ類と並んでファースト・ネイションの極めて重要な食料である。彼らは子持ち昆布だけでなく、ヘムロックやスプルー (Spruce: トウヒ) といった常緑樹の幹枝を、海面下に「おもり」と共に沈めておき、ニシンが春に産卵した後に引き上げて、生食か乾燥させて塩漬けにして保存する (Stewart 1977)。塩漬けカズノコは、そのままでも食用可能であるが、Andrea が醤油とタマネギの薄切りと共に漬け込んだものは、たいへん美味であった。

日本では1950年代後半より、ニシンの漁獲量が激減してしましたが、カナダにおいてもニシンの減少は危惧されており、その資源管理は重要な問題である。我々は自然と調和した伝統的なカズノコ漁法が、ファースト・ネイションの人々によって、今なお続けられていることに感動を覚えたが、彼らが環境に配慮したニシン漁を続けるのは、決してたやすいことではない。2015年春には水産海洋省が、閉鎖されていたセントラルコーストのニシン商業漁業船操業の再開を宣言したため、資源減少を危惧したヘイルツク族が水産海洋省の支局事務所前を

占拠するなどの抗議行動を行なった。最終的に水産海洋省は、2016年度のための共同管理計画を提案したが、こうした軋轢は今後も続くと思われる。

この地域のニシンは、サケやタラなどの大型魚類、クジラやイルカ、アザラシやアシカといった海棲ほ乳類のエサとして、重要な生態系の底辺を担っている。それゆえニシンの減少は単一魚種の問題に留まらず、この海域の生態系全体に関わるものとして捉えるべきである。我々は「ニシンの減少が天然サケの減少を招くのではないか」と憂うのであるが、一方で、現地の商業漁業によって捕獲された成魚のニシンの身は「養殖サケのエサ」になることもあり、卵は日本向け塩漬けカズノコとして輸出されているというのは、何とも皮肉なことである。

日本人にとってカズノコは、正月料理として食べるだけでなく、市場で流通している「子持ち昆布」もカナダ・アラスカからの輸入ものが主となっている。我々の日本人の食材はどこからやってきて、それは現地で何をもらしているのか。我々は情報発信をしていく必要がある。



【図4：針葉樹や昆布によるカズノコ採集法 (Swart1977)】

## 3. 植生および植物利用

北米北西海岸域は降雨量が多く、いわゆる温帯雨林 (Temperate Rainforest) と呼ばれる湿潤な森林地帯が広がっている。現在、当地域の島々にはシダー (Cedar) を中心に、スプルーなど針葉樹が多く見られ、今回の調査でも貝層下の茶色泥炭層から、スプルーの細長い球果 (cone) が、5000年以上の時を経て、あたかも数日前に落ちたかのような良好な保存状態で数多く出土した。しかし、現在この島に多数生えているシダーの球果は出土しなかった。シダーといえば、近現代の北西海岸を象徴する木であり、幹を木材や舟として利用することはもちろんのこ

と、樹皮もバスケットやマットに利用されるなど (Stewart 1984)、生活には欠かせない。Red Cedar が、南西ブリティッシュ・コロンビアで一般的となるのはおよそ 6,000 年前、北中央海岸部では 5,000 ～ 4,000 年前と考えられている (Mathewes 1991)。現在この島には Western red cedar が多く、Yellow cedar も少し見られるが、それらがいつごろ同島に持ち込まれて広がっていったのか、古環境・古景観の復元も彼らの重要な研究課題のひとつである。

また Dale Croes 氏は、長年アメリカワシントン州やオレゴン州で、遺跡出土のバスケットやその製作復元に取り組んでおり、ネイティブ・アメリカンの植物利用にも詳しい。そのため彼と森の中を歩くと、もはや彼自身がインフォーマントとなる。先述のスプールの根は細長く伸びる性質を持っており、北西海岸のネイティブ・アメリカンが、バスケットや帽子類を作成する材料だということで、彼は実際にスプールの根をとり (図5)、30センチほどの角材の切れ目に挟んで茶色の表皮をはいで、細い縄を縛う方法をレクチャーしてくれた (図6)。当地域では、初夏に実をつけるベリー類も、かつては重要な保存食にもなっていた。ちょうど花が咲いていた赤紫色の花を指差し「この花は Salmonberry。これは彼らにとって貴重な食料だ」、また別の低木をみては「ああ、この Salal も紫のベリーになる。ツルもバスケットに使うことがある」と、レクチャーに余念がない。湿潤な気候を反映して、森の中には多くの種類のコケが生えていたが、それらのひとつを取り「このコケは、かつてはオムツとして使われた。吸水性がいいからな」、「あっちの木の枝から白く垂れ下がっているコケは、Beard moss (アゴヒゲのコケ) っていう名前だ。面白いだろう」と、話が止まらない。このアゴヒゲに似たコケも、繊維の染料となることを、後日知った。また、Hakai 研究所のある Calvert 島を散策した折は、日本のミズバショウに似た形の黄色い花を指差し「これは Skunk cabbage。葉が広いからものを包むのにいい」。また、背丈ほどの小さな木を見つけた時は、「この葉で Labrador tea ができる。今日は (Wuixinxv 族の) Johnny が、調子が悪いと言っていたから、これを持って行ってやろう」と、いきなりビニール袋に葉を摘み始めた。一緒に摘みみると、この葉は爽やかな清涼感のある香りがして、お湯を注ぐと一種のハーブティーができるらしい。北米太平洋岸で広く使われている薬効のある葉ということだ。

以上、ここに挙げたのは数例であるが、このように我々は都市部の遺跡調査では得られない貴重な経験を、民族誌上の事例、遺跡形成当時の漁労活動や現在進行形の問題

にも視野を広げることができたのは、大きな収穫であった。



【図5：スプールの根の採集】



【図6：スプールの根の皮をはぎとる】

#### 4. さいごに

Croes 氏および McLaren 氏は、2015年7月26日から8月2日にかけて名古屋で開催された国際第四紀学連合第19回大会 (INQUA XIX) のために来日し、発表を行った。また Croes 氏は、7月30日には総合地球環境学研究所において羽生が主催する国際ワークショップに参加し、8月4日には Croes 氏、McLaren 氏は共に、奈良文化財研究所において「環境考古学講演」を行った。こうした研究の交流を通じて、北環太平洋地域の先史時代に関する比較研究を継続して続けていければと考えている。

また本研究を計画段階から主導し、調査に参加する予定であった松井章先生が、2015年6月9日逝去された。ご冥福をお祈りしたい。また、松井先生の意味を受け継ぎ、縄文文化と世界の狩猟採集民文化との比較研究を継続的に進めることで、先生の学恩に報いたい。

<謝辞> 今回の調査に菅野と真貝が参加するにあたっては、総合地球環境学研究所「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」プロジェクトから支援を受けた。また、2015年度のトリックツ島の調査資金は、Hakai Institute および、Tula Foundation によるものであり、同研究所・基金の代表：Eric Peterson 氏と、Christina Munck 夫人には、心より感謝と敬意を捧げたい。ヘイルツク族の代表として参加してくれた Joshua Vickers、Andrea Walkus 夫妻にも厚くお礼申し上げます。その他の2015年度現地調査メンバーは以下の通りである。記して、感謝申し上げます。Alisha Gauvreau、John Maxwell、Jenny Cohen、Cal Abbott、Daryl Fedje、Joanne McSparran、Grant Callegari、and Johnny Johnson.

註 /Hakai Institute の web ページ <http://www.hakai.org/> Duncan McLaren 氏らを含めた考古学プロジェクトについては <http://www.hakai.org/research/human-habitation-calvert> にて紹介されている。

## ◆引用文献

- 真貝理香・山本直人・羽生淳子・松井章・Duncan McLaren・Dale R. Croes 2015 「カナダ・トリケット島における先史時代遺跡の調査」『考古学研究』投稿中
- 工藤利幸ほか 1982 『盛岡市葦内遺跡(Ⅰ)～(Ⅲ)』岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- Mathews, R. W. 1991 Connections between Palaeoenvironments and Palaeoethnobotany in Coastal British Columbia. In *New Light on Early Farming, Recent Developments in Palaeoethnobotany*, edited by J. Renfrew, pp. 378-387. Edinburgh University Press. Edinburgh
- McLaren, D. (ed.) 2013 Report for the Hakai Ancient Landscapes Archaeology Project: 2011-2012 Field Seasons. Report submitted to the Hakai Beach Institute, Heiltsuk First Nation, Wuixinuxv First Nation, Nuxalk First Nation, and BC Archaeology Branch.
- Pomeroy, J. 1980 *Bella Bella Settlement and Subsistence*. PhD Thesis, Simon Fraser University, Burnaby, BC.
- Stewart, H. 1977. *Indian Fishing: Early Methods on the Northwest Coast*. University of Washington Press. Seattle
- Stewart, H. 1984. *Cedar: Tree of Life to the Northwest Coast Indians*. University of Washington Press. Seattle
- ヒラリー・スチュアート著、木村英明、木村アヤ子訳 1987 『海と川のインディアン』雄山閣 pp.95-102
- 田和正孝編 2007 『石千見』ものと人間の文化史135 法政大学出版局
- White, E. 2006. Heiltsuk stone fish trap: Products of my ancestors' labour. MA Thesis, Simon Fraser University, Burnaby, BC.
- White, E. 2011 Heiltsuk Stone Fish Traps on the Central Coast of British Columbia. *The Archaeology of North Pacific Fisheries*. University of Alaska Press. pp.75-90. Fairbanks, AL

※このレポートは、総合地球環境学研究所「小規模経済プロジェクト」が発行するニュースレター(2015年11月5日発行)より抜粋したものです。